



TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム 2018

災害の多い 国だからこそ

目指すのは、災害看護分野を牽引するリーダーの育成

2015年に始まった「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は、今年で4回目の開催。

東日本大震災をきっかけに、災害時における看護のあり方について考え、

東北で学ぶ看護学生がリーダーシップを身につけることを目的としています。

地震や台風など、災害が多い日本。だからこそ、災害看護について学ぶ人を育てることが、

よりよい社会の実現に繋がると私たちは信じています。



CONTENTS

TOMODACHI イニシアチブについて	03
参加者紹介	05
メンター紹介	07
<hr/>	
TRAINING	08
1年間の活動記録	09
事前研修	11
米国研修	13
事後研修	17
<hr/>	
FUTURE	21
今後の活動	22
<hr/>	
SPECIAL THANKS	23
SPONSORSHIP	24

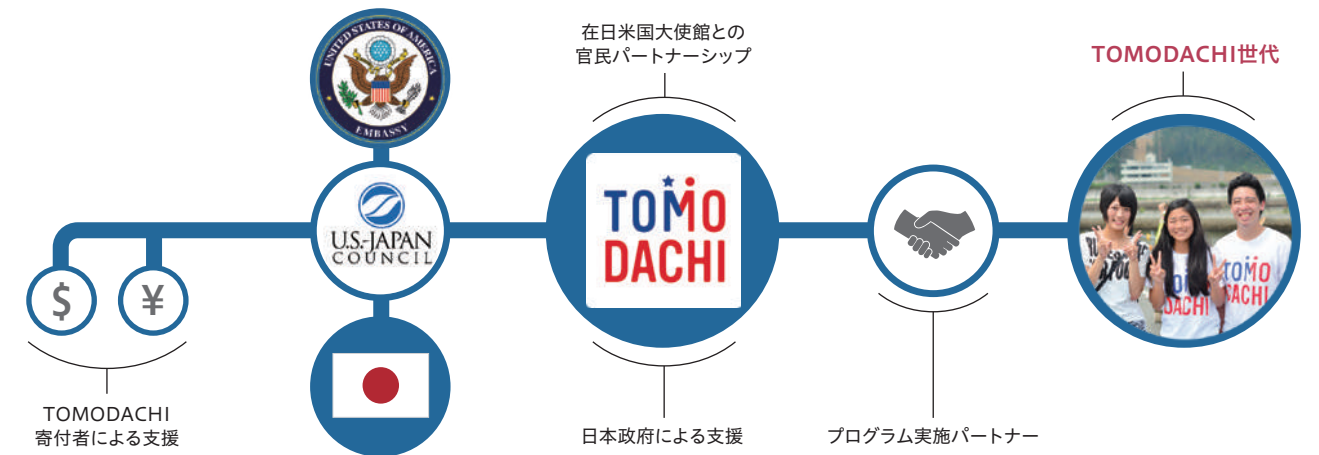
About the TOMODACHI Initiative

TOMODACHIイニシアチブについて

TOMODACHIイニシアチブとは、東日本大震災後の日本の復興支援から生まれ、教育、文化交流、リーダーシップといったプログラムを通して、日米の次世代のリーダーの育成を目指す米日カウンシルと在日米国大使館が主導する官民パートナーシップで、日本国政府の支援も受けています。日米関係の強化に深く関わり、互いの文化や国を理解し、より協調的で繁栄した世界への貢献と、そうした世界での成功に必要な、世界中で通用する技能と国際的な視点を備えた日米の若いリーダーである「TOMODACHI世代」の育成を目指しています。

[TOMODACHI イニシアチブ Webサイト] <http://usjapantomodachi.org/ja/>

TOMODACHIイニシアチブ 組織体制と支援



プログラムを支えるのは、確かな実績を持つスタッフ



橋本 彩

プログラムマネージャー
TOMODACHIイニシアチブ

PROFILE

TOMODACHIイニシアチブでプログラムマネージャーとして勤務。高校生、大学生、そしてヤングプロフェッショナルを対象としたTOMODACHIイニシアチブのプログラムを管理、運営している。前職は在日米軍に勤務し、ベストプラクティスと認められたメンタープログラムをはじめ、各種プロジェクトやアイデアを実施・管理していた実績を持つ。また、2011年に在日米軍が行ったトモダチ作戦では、後方支援の調整員として参加。日本と米国の官民両方の組織にて20年勤務し、司令官や社長などのトップマネジメントに直接仕えるポジションを経験しており、現職でも活躍を続けている。恵泉女学園大学人文学部にて学士を取得し、フェニックス大学でMBAを取得。

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラムとは？

東日本大震災では多くの医療機関が被災し、被災住民は深刻な健康の不安にさらされました。東北地方沿岸部は特に医療過疎が指摘されていた地域であり、大震災で状況はさらに悪化しました。この経験から、住民の近くで寄り添う看護従事者を育成・教育することは将来の地域復興に大きく資すると考え、東北大学で地域医療に携わる菅原準一教授の協力のもと、看護学生の能力育成とリーダーシップの強化を図る教育支援を計画。2015年から「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」としてスタートし、本年まで継続しています。看護学生を対象としている本プログラムは、災害対策分野での専門知識の深化と次世代を担うリーダーシップ育成を目的に、主に事前研修・米国研修・事後研修の3つで構成されています。また、事後研修内で行われる報告会では、看護学生や災害医療従事者、災害看護

に関心を寄せる方たちに対して、参加学生たちが本プログラムで学んだことを共有しています。

プログラム開催地

[事前研修] 宮城(仙台、南三陸、石巻)、東京
[米国研修] ニューヨーク、ニュージャージー、ワシントンD.C.
[事後研修] 仙台

主催

公益財団法人 米日カウンシルージャパン、
TOMODACHIイニシアチブ

協賛

ジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループ

実施運営団体

ローラシアン協会、チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム

参加者紹介

2018年度の本プログラムには、東北で看護を学ぶ7名の学生に参加していただきました。
なぜ参加を希望し、何を学んだのか。このプログラムにかかる学生の想いをご紹介します。

このプログラムで

私は大きく成長できました

私は中学1年生の時に東日本大震災を経験しました。看護師を志していた私は、この体験がきっかけで災害時の対応や看護について興味を持ち、本プログラムに応募しました。プログラムを通して成長を重ね、最終報告会では自信をもってマイクの前に立つことができ、終了後には達成感でいっぱいになりました。もちろん、これに満足することなく、常に向上心を持ち、看護師として働きながら災害看護の知識を活かしていきたいと思っています。ここからまた、新たなスタート。これからはアラムナイ※としてさらなる高みを目指していきます。

儀間 有美さん

仙台医療センター付属仙台看護助産学校
看護学科 3年
宮城県利府町出身



※プログラムを修了した人のこと。詳しくは22ページをご覧ください。

このプログラムで

これからの目標が明確になりました

東日本大震災の際、小学6年生だった私はただ見ていることしかできませんでした。その時から、災害に対する技術や知識を学びたいと考えていました。この7か月間は、私にとって大きな試練でありました。いつもなら見て見ぬふりを自分の嫌な部分に、真正面から向き合う必要があったからです。このプログラムに参加したことで、考え抜く力が大きく成長したと思います。これからも自ら学ぶ姿勢をもち続け、「最終報告会が私のスタート地点であった」と思えるようにステップアップしていきたいです。

小的 瑠菜さん

仙台医療センター付属仙台看護助産学校
看護学科 2年
宮城県仙台市出身



このプログラムで

自分が目指す看護師像が明確になりました

私は高校を卒業した直後に震災を経験。学校の先輩から米国研修の報告を聞く中で、私も災害看護に関する知識を深め、学校の災害対策委員の一員として活動したいと強く思ったので参加を希望しました。プログラム全体を通して、プレゼンテーション・スピーチの仕方、準備の重要性、スケジュールの調整の方法など、多くのことを学びました。そして米国研修最終日、「看護師っていい職業だな」と改めて感じました。今後は、看護学生、そして社会人としてもこのプログラムで学んだことを活かしていきたいと思っています。

佐々木 綾香さん

石巻赤十字看護専門学校 2年
宮城県利府町出身



このプログラムで

目標を見つけました

私や親族は幸いにも震災の被害が少なかったのですが、だからこそ他の参加者の方とは違う経験を共有できるのではと参加を決めました。米国研修での経験を経て、相手のことをもっと理解しようと努力し、思いやる気持ちが自分自身の中に生まれていることに気づきました。また、発信の場をたくさん与えていただきました。今後は、今回の研修でつながった発信の場で、自分の経験や気持ちを伝えます。そして、看護学生が災害看護の知識を自ら学び、実践的な訓練を行うことができる環境を作っていきたいと考えています。

豊川 幸世さん

東北大学 医学部保健学科 看護学専攻 4年
青森県三沢市出身



このプログラムで

自分の思いと向き合うことが大切にできた

私の祖母や親戚は原発事故の被害を受けましたが、自分自身も福島にいながら何もできず、心にぽっかりと穴が空いたような気持ちを抱えていました。大学入学後、他の被災地について学ぼうとさまざまな活動に参加。災害対応に関する知見を広げれば今後の活動に生かせると考え、プログラムへの参加を希望しました。プログラムを通して自分の思いを発信すること、そして周囲に相談することの大切さを改めて感じました。看護師として就職後も、自分の考えを周囲に発信することを大切に、患者さんの療養をサポートできる存在になりたいと思います。

曳地 菜さん

岩手県立大学 看護学部看護学科 4年
福島県福島市出身



このプログラムで

私の世界が広がりました

少しでも多くの知識や経験を得たいと思ったのが、参加を決めたきっかけです。プログラムを通して学んだのは、何かを変えるには自分の想いを発信し、周囲を巻き込むことが大切であること。「何かを変えたい」と思う自分にしかできないことに気づけたので、さらに成長していきたいと思っています。このプログラムで得られた経験は、私にとって大きな財産です。そして、その財産をどう使うのかは自分次第。今後は、一層強くなった「看護、災害医療に携わりたい」という思いを胸に、前に進んでいきたいと思っています。

松野 ひかるさん

亀田医療大学 看護学部看護学科 3年
宮城県仙台市出身



このプログラムで

新たな自分を見つけました

私は米国のさまざまな現場や地域、災害医療専門の施設や団体を訪問し、実際に行われている災害看護の活動を学びたいと思い、参加を希望しました。プログラムを通して、特に「自分の思いを表に出す力」が身についたと強く感じます。まずはプログラムで身につけたプレゼンテーション能力に自信を持ち、さらに向上できるように努めていきたいです。今回のプログラムでは、自分がたくさんの方々に支えられているということを何度も感じました。私自身も誰かを支えることを大切にして、専門職として精進していきたいと思っています。

松野下 彩さん

宮城大学 看護学部看護学科 4年
宮城県名取市出身



Webで生の声を公開しています

1～4期生(本年度)のプログラム中の様子を更新している「研修レポート(旧:参加者ブログ)」。研修の内容はもちろん、研修中に撮影された活動写真も掲載しています。彼らは何を学び、何を感じたのか。学生たちの生の声をご覧ください。

アクセス方法

下記URLまたは右記QRコードからアクセスできます。

TOMODACHI J&J DISASTER
NURSING TRAINING PROGRAM

<https://tjdnt2015.wordpress.com/>



メンター紹介

学生たちが悩んだときにアドバイスをくださる存在、それがメンターです。
今年は3名の「災害看護のプロフェッショナル」が指導に当たってくださいました。



小松 恵さん

岩手医科大学
看護学部
共通基盤看護学講座
特任講師

報告会を終了しても、参加学生の皆様は国家試験や定期試験の準備等で一息つく時間が持ていないか心配です。本プログラム全過程を振り返り、「やってよかった」「何か、次のことを考えよう」等、心が温かく震える思いを抱けたなら、それは成果だと思います。それぞれの抱く思いは違って当然で、感動だけで終わらせて欲しくないと思います。プロとして看護実践者になるためには、何を身につけるか？何を学ぶのか？常に問い続けてください。そして、失敗を恐れずに行動に移してください。今年の学生の頑張りは、何かを諦めかけていた私に「もう少し頑張らねば！」という気持ちを教えてくれました。このプログラムに関わった多くの方々に感謝するとともに、学生の皆様の今後の努力にも期待します。何処かで見守り続けていきたいと思えます。お疲れ様でした。

PROFILE 15年間の臨床経験の後、1999年渡米。St. Luke's Roosevelt病院の感染管理部門で研修を受け、NGOに就職し、NY州の看護師(Registered Nurse)免許を取得。2007年帰国後、東北大学大学院医学研究科に入学、博士課程前期修了。看護職・看護学校教員を経て、2015年から東北大学大学院教育学研究科博士課程後期在学中。2016年より岩手医科大学講師となる。



レンデンマン美智子さん

いわき明星大学
看護学部 教授

9日間ぎっしり詰まった米国研修のスケジュールを7人の学生たちはよく頑張りました。消化しきれないで次のプログラムに進んだこともあったでしょう。自分の能力のなさ、知識の足りなさを徹底的に見つめさせられ失望したこと、さらにお互いが励ましあって勇気ももらったこともあったでしょう。この研修で自分が戻れる場所を作れたのではないのでしょうか。これからどんなに苦しいことが人生の中であっても、この研修で頑張れたことが原点になってほしいと心から願います。そしてこれからが本当のスタートであることを自覚して下さったと思います。

PROFILE 1883年から1988年、米国ワシントンDCのジョージタウン大学看護学学士、ニューヨークのコロンビア大学で看護学修士取得。2009年ワシントンDC カトリック大学で博士を取得。小児医療センター(ワシントンDC)脳神経外来で20年間、発達小児外来で5年間、ナースプラクティショナーとして勤務。2017年4月より明星大学看護学部 小児領域で教授として勤務。



須田 智美さん

東北大学
医学系研究科 公衆衛生学
修士課程在籍

この8か月間を通じて学生さんたちは、災害医療に携わる厳しさや自分の心身ケアの大切さなどを学び、将来の自分が目指す看護師に近づくために、自分の思いと真剣に向き合う姿が見られました。そして、日本と米国での研修を通じて、両者の違いだけでなく、国を越えても共通する看護師の仕事や学び、自分たちが目指している職業の可能性を知ることができたと思います。プログラムに参加する前よりも随分と視野が広がった学生さんたちは、このプログラムの参加を通じて、人と比べることのできない、自分の自信に繋がる経験になったと感じます。

PROFILE 2008年東京大学医学部付属病院にて、助産師として勤務。2012年青年海外協力隊として、ブータン王国で2年間活動。2014年秋田大学医学部付属病院にて、助産師として勤務。2017年から東北大学医学系研究科公衆衛生学修士課程で、災害医療国際協力学を学ぶ。



TRAINING

基礎から実践までの3ステップ

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は、災害看護の基礎を学ぶ事前研修、米国で最先端の災害看護を体感する米国研修、米国での学びを地元や自分の通う学校に還元する事後研修の3ステップから成り立っています。3つの研修を通して、災害看護の知識だけでなくプレゼンテーションスキルやリーダーシップ、さらに日本とアメリカの架け橋となれるような、グローバルな視野を身につけます。そして最終的には、次世代を牽引するリーダーとして活躍することを目指していくのです。ここからはそれぞれの研修について振り返り、何を学んだのか、参加学生からのコメントも織り交ぜながらご紹介します。

1年間の活動記録

災害看護と向き合い続けた311日

本プログラムは、1月26日の募集開始から12月2日の最終報告会まで、計311日をかけて行われました。このページではその軌跡をご紹介します。



2018 1 Jan.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

募集スタート!

2018 2 Feb.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

募集期間

2018 3 Mar.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

募集終了

2018 4 Apr.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

選考会

プログラムに参加する学生を選考。厳正な審査により最終的に7名の参加が決まりました。

2018 5 May

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
		1	2	3	4	5
		6	7	8	9	10
		11	12	13	14	15
		16	17	18	19	20
		21	22	23	24	25
		26	27	28	29	30
		31				



2018 6 Jun.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

事前研修①

「災害看護とは?」など基礎から学習。また被災地を訪問し、災害看護の必要性を再確認しました。

2018 7 Jul.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

事前研修②

スピーチの練習を行ったり、米国の医療と看護について学ぶなど、米国研修に向けて準備を行いました。

2018 8 Aug.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

出発!!

米国研修

米国研修では9日間で10か所を巡り、米国における災害看護の取り組みや考え方を学びました。

帰国!!

2018 9 Sep.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

事後研修

学生それぞれがアクティビティを企画し、メンターからのアドバイスをもとにブラッシュアップを重ねました。

2018 10 Oct.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

各自!

アクティビティ実施

米国研修を通して学んだことを、地元や自分の通う学校へ還元。学びの輪を広げる活動をそれぞれで行いました。

2018 11 Nov.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

アクティビティ実施



2018 12 Dec.

sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

最終報告会

災害看護に興味のある人たちの前で、プログラム全体を通して学んだことを発表し、共有しました。

事前研修

米国での学びの前にしっかり準備

VOICE

刈地 菜さん
岩手県立大学
看護学部看護学科4年
福島県福島市出身



佐藤誠悦さんと佐藤敏朗さんのお話を聞き、特に2つが重要だと感じました。1つ目は被災者のメンタルヘルスケアの重要性です。震災当時、佐藤誠悦さんは妻を亡くした思いを語ることはなかったそう。「笑顔になれたのはここ2年ぐらい」という言葉が印象的でした。2つ目は自らの知識や考えを緊急時に発信できるリーダーの重要性です。佐藤敏朗さんのお話から、災害時の避難体制やリーダーの在り方を考えることが必要だと感じました。もし緊迫した状況に置かれたら適切な判断ができるだろうか、看護師の役割についても考えさせられました。



PART 1 プログラムスタート

講義「災害医療と災害看護」

東日本大震災の教訓を受けて、日本の災害医療・災害看護分野は少しずつ進歩してきました。その軌跡を知り知識の基盤を固めるため、江川新一先生（東北大学）よりお話を伺いました。震災発生時の各医療機関の動き、現在行われている改革、さらには本当に必要な「支援」についてなど、さまざまなテーマでご説明いただきました。

東日本大震災を例に
災害医療について学習



被災した各所を見学

南三陸町にて佐藤誠悦さん（元南三陸消防署副署長）からお話を伺いました。その後、南三陸町内をご案内いただき、震災で被害の大きかった各地を訪問。また大川小学校跡地では、佐藤敏朗さん（元中学校教諭、大川小学校に通学していた娘さんが津波により被災）にもお話を伺いました。お二人から経験談や当時の様子を聞くことで、看護師として自分はどう関わるか真剣に考える機会となりました。

震災経験者の話を聞き
震災への想いを深める



選考で選ばれた参加者がまず始めに行ったのが、2回にわたる事前研修です。

1回目は基礎知識の学習、2回目では米国研修への本格準備と、テーマを分けて行いました。

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システムからの講演

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システムからエミリー・ドローズさん（同病院看護師）と梅津健太さん（同病院技術職員）にお越しいただき、米国研修前に予備知識を習得しました。エミリーさんからは米国における医療と看護について、そして梅津さんからは米国研修中に訪れる予定の研修施設についてご説明をいただきました。お二人から直接お話を聞くことで、米国研修に向けて期待と緊張が高まりました。

アメリカの医療と
看護について勉強



PART 2 米国研修への準備

VOICE

佐々木 綾香さん
石巻赤十字看護専門学校2年
宮城県利府町出身



事前課題レポートを元にした「米国で学ぶべきこと、やりたいこと」についてのワークショップでは、米国研修での目標を立てました。私には理想の看護師像があるにもかかわらず、帰国後のアクティビティを意識した結果、当初は興味関心と離れた目標を立てていました。しかし、「興味があることを目標としたほうが、看護師を目指す上でも看護師になってからも役立つし活かせる」というアドバイスで、学ぶことへの興味がより一層増しました。また、先輩からの「失敗しても間違っても大丈夫」などのメッセージも心に響きました。

ゲームを通して
避難所運営の大変さを実感



避難所運営ゲーム体験

小坂未来先生（岩手医科大学）から説明を受け、避難所運営ゲーム（HUG）に挑戦しました。これは、災害時を想定して机上で避難所の運営をするという訓練。次々に訪れる避難者への対応や救援物資の活用など多くの事項に対応する必要があり、ゲーム中は焦りと緊張感が漂いました。自分に足りないものや、このような場面での対処方法を考えるきっかけになりました。また、小坂先生は現岩手県DMAT（災害派遣医療チーム）の隊員。日本のDMATに関する講義を通して、将来のキャリアを考える機会にもなりました。



米国での本番に向け
繰り返し練習

スピーチ演習

米国研修でのスピーチ発表に向けて演習を行いました。事前課題として準備した原稿を発表し、仲間やスタッフからアドバイス。練り直しと練習を行った上で次の日に再度披露し、内容や話し方が見事改善しました。初めての経験で戸惑っていた学生もいましたが、前回の事前研修で見た先輩の姿を思い浮かべながら取り組みました。



U.S. Study Tour

研修地
MAP

米国研修

最先端の災害医療をアメリカで体感

U S A

いよいよ米国研修。さまざまな場所を訪れ、最先端の災害医療を学びました。

まずは、本年のプログラム内で訪れた場所をご紹介します。

2 ラトガース大学看護学部
Rutgers School of Nursing



PICK UP ▶ p.15

3 9/11 トリビュート ミュージアム、国立9/11 記念&博物館
9/11 Tribute Museum, National 9/11 Memorial&Museum



前年に引き続き訪問。9.11の状況を生々しく残す展示物や文献を見て、記憶を風化させないこと、語り継いでいくことの大切さを学びました。

6 米国軍大学保健衛生センター
Uniformed Services University of the Health Sciences
Val G. Hemming Simulation Center



軍の医療関連施設である関係で、より実戦に近い演習が可能なシミュレーター機器や施設を保有しているため、見学させていただきました。

7 チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム
Children's National Health System



PICK UP ▶ p.16

4 ニュージャージー州訪問
Site Visit to New Jersey



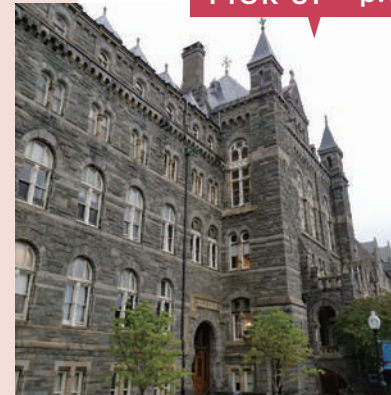
ハリケーンサンディの被害を受けた地域を中心に訪問し、実際に被害に遭われた方や救命救助に尽力された方から当時のお話を伺いました。

5 ジョンソン・エンド・ジョンソン本社、同社パワーハウス博物館
Johnson&Johnson Headquarters, Johnson&Johnson the Powerhouse Museum



PICK UP ▶ p.15

8 ジョージタウン大学
Georgetown University



PICK UP ▶ p.16

9 コロンビア特別区
ナショナル・ガード本部
District of Columbia National Guard Headquarters



国や地域を守る軍隊として、緊急事態対応の観点からどのようにチームで動いているか、日々準備をしているかについてお話を伺いました。

10 フェアファックス郡 タスクフォース1
VA-Fairfax County Task Force 1
International Urban Search and Rescue



災害の際に派遣される方のお話を伺いました。出動要請から出動までのプロセスや、派遣中の本人とその家族へのケアについて学びました。

1 NYUランゴーン医療センター、
NYUローリー・マイヤーズ看護大学
NYU Langone Medical Center,
NYU Rory Meyers College of Nursing

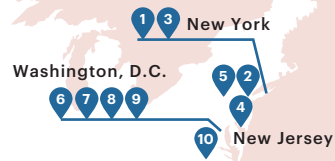


ハリケーンサンディにより病院全体が避難した時のお話を聞きました。看護大学では学生たちや学校による被災地での活動について伺いました。

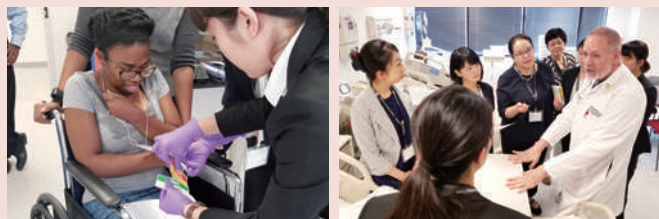
Pick UP U.S. Study Tour

米国研修 最先端の災害医療をアメリカで体感

USA



2 ラトガース大学看護学部 Rutgers School of Nursing



こちらでは実践的な訓練を行いました。場面は地震が原因の電車の脱線事故。多くの死傷者が出ており、運ばれてくる患者をトリアージし治療するというものです。運ばれてくる患者役は症状や外傷をリアルに模した役者の方をお願いし、学生たちはトリアージ班と治療班に分かれて訓練。緊迫感のある中で自分がとっさにどんな行動を取るのか初めて知った学生も多く、感慨深い訓練となりました。

VOICE この訓練で学んだのは、緊急時には素早い状況判断と計画変更が必要なこと、そしてトリアージを行う看護師の役割です。私はこの訓練で焦ってしまい、周りが見えなくなっていました。災害時に適切な対応を行うためには、普段から練習を重ねることが重要。非常時にしっかり対応できるよう、今後も訓練していきたいと思えます。



儀間 有美さん
仙台医療センター附属仙台看護助産学校 看護学科 3年
宮城県利府町出身

5 ジョンソン・エンド・ジョンソン本社、同社 パワーハウス博物館 Johnson&Johnson Headquarters, Johnson&Johnson the Powerhouse Museum

本社ではJ&Jが医療と看護にかける想いや信念、世界各国で災害が起きた時の支援についてなどのお話を伺い、看護学生協会の皆さんのパネルディスカッションを見学しました。日本からは、参加学生を代表して儀間さんがスピーチ。震災時の自身の経験を元に発表しました。また、今年同社の軌跡をまとめた博物館にも訪問し、医療の歴史と、J&Jの成り立ちや医療への貢献を学びました。



7 チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム Children's National Health System



2日間にわたり研修を行い、実践的かつ体験型の演習に挑戦しました。1日目は院内のツアーと講義、除染訓練を実施。2日目は非常用持出袋 (go bag) に関するワークショップ、机上でのトリアージ訓練、そして「Med Sled®」という医療用ソリによる患者避難輸送の演習を行いました。いかなる場合にも動じぬよう、常日頃から病院全体をあげて色々な訓練やトレーニングを行っていることを伺いました。

VOICE こちらは個人防護服を使用した汚染除去訓練を行いました。有害物質による曝露には早期対応が重要。しかし防護服を着ると、通常のコミュニケーションがとれません。そのためチームで事前に役割を決めることや、ハンドサインを習得し、平時のトレーニングで技術の向上と信頼関係の形成を行うことなどが大切だと感じました。



松野 ひかるさん
亀田医療大学 看護学部看護学科 3年
宮城県仙台市出身

8 ジョージタウン大学 Georgetown University

午前の講義では災害時における看護師の役割や看護師自身のケアなどについてお話を伺いました。午後は2グループに分かれ、グループセッション形式の演習を行いました。こちらは、災害時の病院を想定し、看護や救命に限らず想定されるさまざまな状況の優先順位を考える、というものでした。看護と救命に特化したトリアージ訓練とはまた違い、互いに意見を活発に交換し合うことのできたセッションでした。

VOICE 研修の中で学んだのはセルフケアの大切さ。特に多数の傷病者がいる状況や倫理的に難しい判断を迫られる場面では、自分の心と体を守る必要があります。講義での「自分自身をケアしないと他の人をサポートする力も出ない」という言葉が印象に残りました。私も、万全な状態で患者・家族と関われる看護師になりたいと思います。



松野下 彩さん
宮城大学 看護学部看護学科 4年
宮城県名取市出身



9日間で訪れた10か所のうち、4か所をピックアップ。参加した学生がその場所でのどんなことを感じたのか、コメントも合わせてご紹介します。

事後研修

研修での学びを地域に還元

米国研修から帰国後は、研修で学んだことを自分の通う学校や地元の人々に伝えるためのアクティビティの準備に入りました。ここでは、それぞれの活動についてご紹介します。

[事後研修の流れ]



米国研修から帰国



アクティビティの企画

米国研修で得た学びをベースに、各自で実施するアクティビティの企画書を作成します。



事後研修

各自のアクティビティ企画を共有し、メンターや同期のアドバイスを受けて練り直します。



練り直し



アクティビティ実施

企画書に基づいてアクティビティを実施。各コミュニティで学びの還元が行われました。



最終報告会

全日程を通して得た学びや気づきを5分間のプレゼンテーションにまとめて発表しました。

[アクティビティ紹介]

1 学生寮の防災マニュアルと避難経路図を作成

事前に寮生を対象としたアンケートを実施し、参加者のニーズを把握した上で、仙台看護助産学校の学生寮の防災マニュアルと避難経路図を作成。入寮している学生を対象にそれぞれを配布し、作成した経緯や米国研修での学びを共有しました。



VOICE



寮委員会の学生や教員の協力を得る際には自分の考えをしっかりと伝え、根拠や経過に沿って理解を得られる説明が必要なことを学びました。アクティビティでは企画の準備・実施を通してリーダーシップを発揮する機会が多く、成長につながったと思います。今回限りで終わらず、よりよい備えを実現するため、継続して取り組んでいきたいです。

儀間 有美さん 仙台医療センター付属仙台看護助産学校 看護学科 3年 / 宮城県利府町出身

2

広域防災拠点区域の予想図を使用し避難経路をシミュレーション

「環境に関心を持つのも防災対策」と伝えるため、学校の学生を集めて避難経路のシミュレーションを行いました。「学校内で被災し拠点区域内のベースキャンプに避難する」という設定で、避難経路を4人グループに分かれて考えました。



VOICE



アクティビティを通して痛感したのは、「伝える」と「伝わる」の違いです。参加した友達に感想を聞くと「避難経路を知ることが大事なんだよね」と言われました。アクティビティの目的が伝わっていなかったのです。その反省から、伝わっているか確かめるには自分からリアクションすることが大切だと学びました。

小的 瑠菜さん 仙台医療センター付属仙台看護助産学校 看護学科 2年 / 宮城県仙台市出身

3

避難袋のワークショップを企画し実際に購入する機会も設置

学内で避難袋のワークショップを企画しました。自分に必要な防災グッズのリストを作成後、希望者とショッピングモールに行き、100円ショップなどで購入できるグッズを確認。後回しにしがちな避難袋の作成をこの機会に行うことに結びました。



VOICE



計画時に実施した校内インタビューでは「防災袋について何をどこで用意できるのか分からない」という声がありました。そこで今回のアクティビティを企画。しかし、主体的に計画から運営までを行うのは初めてで大変苦労しました。今後企画する際には、計画から実施まで短期間で進められるように、今回の学びを生かしていきたいです。

佐々木 綾香さん 石巻赤十字看護専門学校 2年 / 宮城県利府町出身

4

災害についての知識と英語への興味がわく企画を実施

災害には平時からの備えが重要であると伝え、英語に興味を持てるようなアクティビティを企画しました。2部構成で行い、1部では非常持ち出し袋演習を実施。2部では米国研修の学びを伝え、自分が成長したことについて英語でスピーチを行いました。



VOICE



アクティビティを企画するにあたり「自分が参加者に伝えたいことは何か」を考える中で、自分と向き合いました。そして分かったのは、「私は自分のことを伝えるのが苦手」ということです。海外研修の学びを人前で発表することは大きな挑戦でしたが、参加者からフィードバックをもらえたことが自信につながりました。

豊川 幸世さん 東北大学 医学部保健学科 看護学専攻 4年 / 青森県三沢市出身

5

台風が接近した際、避難に必要な情報収集のためのワークを実施

台風接近時にどんな情報が避難の判断につながるか考えるアクティビティを行いました。今回は台風24号の事例をもとにグループワークを実施。情報を得る上で大切な「情報の信憑性」と「認知バイアスの危険性」についても説明しました。



VOICE



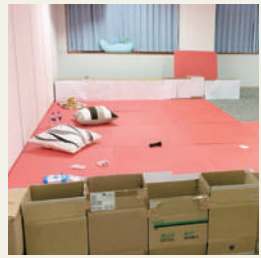
アクティビティ中の声や事後アンケートから、参加者の防災への関心を高め、今後の防災への行動変容を促すきっかけとなり、目標を達成できたと思います。自分の被災体験や米国研修の体験からの想いを、対象者のニーズに合わせて共有することの大切さを改めて感じ、達成感も得られました。今後は他学年を対象とした企画も検討したいです。

曳地 菜さん 岩手県立大学 看護学部看護学科 4年 / 福島県福島市出身

6

学園祭で停電体験を企画 暗闇で物を探す大変さを伝える

大学祭で地域の方を対象に、避難袋と停電体験の企画を行いました。まずは部屋が明るい状態で状況を説明し、物の位置も把握。その後、地震が発生し避難する想定で、暗い部屋の中で避難に必要な物資を収集し、暗闇で探す大変さを伝えました。



VOICE



企画前後のアンケート結果から企画の目標は達成できましたが、参加者の少なさを、準備不足が反省点として残りました。今回のような企画に多くの方が参加すれば、地域の防災意識向上に効果があると思うので、この反省を次回に繋げたいです。防災の輪が鴨川から日本中へ広がるように、継続して行動に移していきたいです。

松野 ひかるさん 亀田医療大学 看護学部看護学科 3年 / 宮城県仙台市出身

7

大学4年生を対象にHUGを実施 日頃のトレーニングの重要性を周知

私が通う大学の4年生を対象に避難所運営ゲームを行いました。米国研修報告会を行った後、グループに分かれてHUGに挑戦。終了後にはグループごとで異なる点を確認しつつ、災害医療のトレーニングの重要性や、実践的な訓練の大切さを伝えました。



VOICE



今回の参加者は私と関わりのある方々にも関わらず、大きな緊張に見舞われました。今後はゆとりを持てるよう練習を重ねたいです。また、周囲のサポートの偉大さも感じました。5名の学生に協力してもらいましたが、彼らの存在が心の支えでした。自分も日頃から誰かを支えられるよう努力したいと改めて思いました。

松野下 彩さん 宮城大学 看護学部看護学科 4年 / 宮城県名取市出身

最終報告会

プログラムの総まとめである最終報告会には多くの方にお越しいただきました。発表はプログラムで学んだことや自分が一番伝えたいことをベースに各自でテーマを設定し、それに基づいてプレゼンテーション。5分という限られた時間ではありましたが、それぞれが思いの丈を真摯に語る姿には会場全体が引き込まれました。



曳地さんの報告



本番前の最終確認



参加者紹介



プログラムの概要を発表



出番を待つ緊張の時間



小松恵先生からのお話

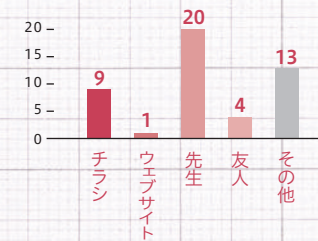


報告会後の懇親会

来場者アンケート

コメント(一部抜粋)

Q. 本報告会をどのようにして知りましたか? ※複数回答もあり

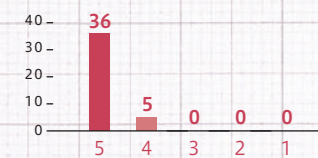


米国での研修について“大変だった”と言っていましたが、本日の発表を聞いて必ず身になっていることを実感しました。(仙台医療センター附属仙台看護助産学校 教員)

プログラムに参加した先輩方の話、発表を聞いて胸を打たれるものがあった。(いわき明星大学 学生)

学生は研修とアクティビティを通して、大変成長できたと思いました。一人ひとりをしっかり見てくださったのが伝わってきました。(参加者 ご親族)

Q. 本報告会に参加しての満足度は? 5(非常に満足)>1(全く満足でない)



プログラムを通して、学生が著しく成長していることがよく分かりました。(宮城大学 教員)

来年のプログラムに是非とも参加したいと思いました。全てのお話が自信に満ちた素晴らしいもので感動しました。(福島県立医科大学 学生)

災害看護を学ぶ機会、また看護師として成長される機会にJ&Jがスポンサーとなっていることに喜びを感じました。(スポンサー)

Q. 災害医療・災害看護への興味・関心は高まりましたか? 5(非常に高まった)>1(全く高まらなかった)



自分と近い年の学生なのに話をする姿がとても大人に見えました。(岩手医科大学 学生)

参加者の方々の学びを聞いて、自分自身の経験や学びを見つめ直し、発信できるようにしていきたいと感じました。(仙台徳洲看護専門学校 学生)

FUTURE

学び続けよう、よりよい未来をつくるために

2018年の「TOMODACHI」&「災害看護プログラム」は、多くの方のご支援により無事に全日程が終了しました。しかし、参加学生にとってはこれが終わりではありません。むしろ、ここからがスタートといえるでしょう。なぜなら、次世代を率いるリーダーとして活躍するためには、学び続けることが大切だからです。参加してくださった皆さんには、プログラムで学んだことを存分に活かし、日本の災害看護の発展を目指して、周りを率いるリーダーとして成長してほしい。それが、私たちの願いです。ここからは、プログラムを修了したアラムナイのその後の活動についてご紹介します。

今後の活動

プログラムを終えた後も活動続けるアラムナイ

アラムナイの今

プログラムで学んだ「備える大切さ」を学校や地域でも広める

アラムナイとは、プログラムを修了した学生のこと。
アラムナイの中には、今でも活動続ける人たちがいます。その1人である阿部さんに、現在の活動について話を聞きました。

学内で勉強会を立ち上げ、災害について学ぶ機会を創出

私は3期生としてこのプログラムに参加し、これまでの災害から学び、備えることの大切さを知りました。現在は学内でDNS～備え隊～という勉強会を立ち上げ、災害やその対応について考える場を作る活動をしています。本年度は活動の場を地域にも広げ、自分専用の災害用持出袋を作るワークショップを開催しました。石巻市は3.11で大きな被害を受けた地域の一つ。学生や地域の方々が次の災害へ備えていくために少しでも力になりたいと考えています。今後はプログラム4期生の佐々木綾香さんを中心として、学校の顔となる活動にすべくサポートしていきたいです。



阿部 美沙さん
石巻赤十字看護専門学校
(2019年3月卒業)

アラムナイのこれから

プログラムが終わってもずっと繋がり、広がり続けるアラムナイの輪

TOMODACHIイニシアチブは、たとえプログラムが終わっても繋がりは途絶えません。
さらに、アラムナイのためのプログラムを展開しています。

TOMODACHIアラムナイ・リーダーシップ・プログラム

TOMODACHIイニシアチブでは「TOMODACHIアラムナイ・リーダーシップ・プログラム」を実施しています。これは、日米の若者たちにインスピレーションを与え、TOMODACHIでの経験をさらに深めてもらうことが目的です。このプログラムに参加することで、よりよい世界の実現に向けて経験やスキル、自信を身につけるきっかけが生まれます。さらに、プログラムの壁を越えて14歳から40歳までのアラムナイ同士が交流を持てるような様々な機会を設けています。



SPECIAL THANKS

お世話になった皆様

江川 新一 教授

東北大学 災害科学国際研究所
災害医療国際協力学分野 教授

佐藤 誠悦 様

震災語り部 元 気仙沼・本吉地域広域行政事務組合
南三陸消防署 副署長

佐藤 敏朗 様





認定NPO法人カタリバ
東北復興事業部 コラボ・スクール 女川向学館

運営協力団体

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システムは1870年の設立より、ワシントンD.C.を拠点に全米の子どもたちに医療ケアを提供しています。シェイク・ザード・キャンパス(高度小児医療)では、313床のベッドを有する急患治療病院のほか、3州に跨ぎ活躍する小児外傷センター、そして各種輸送手段を駆使し

た救命救急搬送プログラムなどを有します。全米でも様々な企業や団体より最優良病院として多くの表彰や認定を受け、小児医療におけるその専門技術とイノベーション、また地域から国レベルでの権利擁護を通して子どもたちの為に先立つ代弁者としての姿勢が支持されています。

STAFF		John Walsh Outreach Coordinator, Cardiology		Sarah Birch, DNP, APRN, CPNP-PC Director, Advanced Practice Nursing (Children's National Health System) Assistant Professor of Pediatrics (The George Washington School of Medicine and Health Sciences Center) Adjunct Faculty (The Johns Hopkins School of Nursing)
		Emily Dorosz, MSN, RN, CPN, CPEN Clinical Program Coordinator EMS/Base Station Emergency Medicine & Trauma Center		Kenta Umetsu, ms Research Facility & Biosafety Director
基本情報	所在地 連絡先	111 Michigan Ave NW, Washington, DC 20010 U.S.A. +1-202-476-5000	設立 事業内容	1870年 小児専門総合病院

ローラシアン協会

ローラシアン協会は非営利団体として1990年に米国イリノイ州にて設立されました。様々な世代を対象とし、年間およそ総計2000人の参加者を誇る日米間の多種多様な派遣・招聘プログラム事業を行っています。2015年には70ヶ国を超える国からの米国留学を専門とする非営利教育団体PAX - Program of Academic

Exchangeに統合され、現在はPAX Laurasian Exchangeという団体名で、日々変化する世界を自身の肌で感じ、経験する機会を提供しております。日本事務局はローラシアン協会として運営しており、2016年度より本プログラムの運営事務局を担当しています。

STAFF		日高 夢 プログラムディレクター		庄寄 由紀 プログラムマネージャー
	基本情報	所在地 連絡先	〒153-0064 東京都目黒区下目黒5-5-17 03-3712-6176	設立 事業内容

SPONSORSHIP



ジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループ*

トータルヘルスケアカンパニーとして負うべき責任

私たちジョンソン・エンド・ジョンソンは、健康こそが豊かな人生の基盤であり、地域社会の繁栄と、発展を促す原動力であると考えています。130年を超える長きにわたり、私たちはすべての世代のライフステージに応じて、人々の健康を支えてきま

した。世界中の人々の健康に非常に大きな責任を負っているジョンソン・エンド・ジョンソンは、「我が信条 (Our Credo)」の理念にもとづき、ビジネスを実践し、社会貢献を通じて地域社会に対する責任を果たせるよう努めています。

東日本大震災からの復興支援について

当社は長期的な視点で、時間とともに変化する被災地のニーズを把握し、その時々が必要とされる支援に取り組んできました。その取り組みは、当社が提供する医療機器等の製品を被災地へ届けるための物流確保やがれきの撤去作業等から始まり、岩手県大槌町の仮設診療所建設、さらに福島県での子育てママと赤ちゃん支援プログラムや子どもの発育・発達プログラム等

にも及びます。震災後の復旧プロセスは終了しても、復興へのプロセスはまさに進行中。今、どのような支援が必要とされているのか、未来に向けてどのような取り組みが出来るのかを考え、今後も、ジョンソン・エンド・ジョンソンだからこそできる支援に取り組んでいきたいと考えています。

STAFF		伊藤 佐和 社会貢献委員会マネジャー		坪井 圭子		井田 一宏
	PROFILE	2004年、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社に入社。経理財務本部長秘書として10年間勤務し、社会貢献委員会の活動にも従事。2014年7月から専任者として、同委員会のマネジャーに着任。特に女性・子ども・東北復興支援において、非営利団体のプロジェクトをサポートする。また、「買うボラ(東北のNPOなどが提供する商品を買うことで支援する)」や「社内のチームビルディングにもつながるプログラム設計」など、“できる人が、できる時に、できる事を”をモットーに、社員が楽しんで活動に参加できる環境づくりに取り組んでいる。				
SUPPORT MEMBER						
基本情報	所在地 連絡先	〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 03-4411-7200(メディカルカンパニー代表)		設立 事業内容	1978年 総合医療・健康関連用品の輸入・製造販売	

* ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社(コンシューマーカンパニー、メディカルカンパニー、ビジョンケアカンパニー)、ヤンセンファーマ株式会社で構成。



看護の未来を担う学生にもっとチャンスを

世の中を、そして未来を変えていく看護師を、東北から

プログラムへの参加を希望する学生に多いのが、「震災のときに何もできなかったのが悔しい。

だから、災害に対する知識やスキルを学びたいと思った」という理由。

私たちはこれからも、災害看護を学びたい学生のためにその機会を提供します。

そして、被災者の方の心に寄り添える看護師を育成することで、よりよい未来の実現に貢献します。

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム 2018

